

ヤナ・ファウス、ホラント・クナウブ

過ちから学んだこと

連邦議会選挙におけるドイツ社会民主党 (SPD) の成功は、偶然ではなかった

総論

壊滅的な結果に終わった2017年の連邦議会選挙の後、ドイツ社会民主党 (SPD) は、選挙運動の分析と評価のために外部作業部会を設置した。本論では、SPDがそこから学んだこと、また他党の幹部が学んだであろうことを検証する。

連邦議会選挙はどれもユニーク

各ドイツ連邦議会選挙には、それぞれ予測できないような特異性がある。それは、2021年の選挙の場合もきわめてよく当てはまった。選挙前の数か月は新型コロナウイルスのパンデミックの影響で、閉め切った部屋での大きなイベントはほとんど不可能だった。そのうえ、初めて3つの党が首相候補を立てた——連邦共和国の政党政治細分化へ、各党が貢献したのである。このため初めて1対1ではなく三つ巴の戦い、つまり序盤はラシェットとベアボックの一騎打ち、終盤戦ではラシェットとショルツの決戦となったのである。

この例外的で変則的な力関係のなかで、選挙を4か月後に控えたSPDは全く望みがなく、得票数は20パーセントにも満たないと言われていた。SPDは多くの人から長いこと見捨てられた大政党であり、候補者はやる気がなさそうだし、伝統的な強みである社会的分野においてさえかなり情けない支持率だった。だが蓋を開けてみると、25.7パーセントもの票を獲得して第1党となっただけでなく、2017年の得票率を5.2パーセントも上回った。こうしてSPDは、2013年の連邦議会選挙とそっくり同じ成果を上げたのである。

過ちから学ぶ

2017年に党首のマルティン・シュルツが下した英断の1つは、有権者の自分への支持率の浮き沈みを、外部の作業部会に分析させたことだ。「過ちから学んだ」結果は、シュルツにとって必ずしも好ましいものではなかったが、4年後にSPDが成功するための基盤の1つとなった。

オラフ・ショルツの選挙対策チームだけでなく、党指導部全般に採用された作業部会報告書の勧告は、たとえば次のようなものだった。

- 党の結束は——数か月にわたる苦難の時期でさえ——比類なきものだった。そのうえ、SPDが選挙運動中、これほど一致団結したイメージを打ち出せたこともかつてなかった。2019年11月末の党首選でガイヴィッツ/ショルツ組が、エスケン/ヴァルター＝ボルヤンス組に敗北を喫したことを考えると、これは特に注目に値する。新しく選出された党首は、従来のように首相第1候補となる権利を行使せず、オラフ・ショルツを党首選に送り込むことに同意したのである。これはひとえに、党幹部とラルス・クリンバイル幹事長が力を合わせて党をまとめ、党内部の「体力回復」にいち早く取り組んだおかげである。
- また早い時期での候補者指名も、大きな助けとなった。2021年4月にアンナレーナ・ベアボックとアルミン・ラシェットがそれぞれの党から首相候補として指名された時、オラフ・ショルツはすでに何度も品定めされ、メディアにより隅から隅まで（弱点も含めて）解説されていたのである。
- SPD内には、候補者のために明確に定義された戦略本部があった。ラルス・クリンバイルが選対本部長としてショルツのための選挙戦を組織し、党本部が協力して取り組むようにした。連邦議会議員団と各州首相もこの選挙計画に参加していたが、実質的な議論には公には触れなかった。

- 党指導部は選挙綱領を、従来のような無味乾燥な文章を詰め込んだものではなく、できるだけ短く簡潔な（64頁）、中身のある大要としてまとめることができた。
- SPDの得票率が悪い時は、必ず社会的分野での能力評価が低い。このためオラフ・ショルツは最低賃金、市民手当（Bürgergeld）、手頃な価格の住宅を選挙キャンペーンの中心に据え、年金水準に関しては疑問の余地を残さないことでこの分野を固めた。
- 連立政府において社会民主党の閣僚らがよい仕事をしたことも、確かに大きな支えとなった。フベルトウス・ハイル、フランツィスカ・ギファイ、クリスティネ・ランプレヒト、スヴェニャ・シュルツェ、そしてハイコ・マースらの仕事は、キリスト教民主党的同僚らのそれとは明らかな質的違いを見せた。特に副首相だったオラフ・ショルツは、2018年に連邦財務大臣となると、すべてにおいて正しい措置を取った。COVID-19と洪水という2つの大きな危機に際しては、迅速かつ包括的に予算を供給しただけでなく、危機に強い政治家というイメージを確立した。選挙戦では、このことは間違いない利点となった。
- 投票日のかなり前から、SPDは独自のソーシャルメディア部門を拡大していた。この連邦議会選挙では、ネットに精通した世代はSPDの最も強い味方というわけではなかったが、それでも早い時期にソーシャルメディアに力を入れたことは役に立った。

他者の過ち

もちろん、競争相手の失敗も、オラフ・ショルツとその選挙戦に利益をもたらした。ラシェットとベアボックのつまずき、不安定さ、失態の前では、ショルツ陣営のきわめて受け身のなアプローチも目立たずに済んだのである。別な状況では、ショルツもその提案も「面白味がない」とのレッテルを貼られたかもしれない。また「Wirecard」、「Cum-Ex」、最近では「FIU」にまつわるスキャンダルで窮地に追い込まれたことを考えれば、もっと悪い事態になった可能性もある。だがショルツを囲むチームは、起こりうる攻撃を予想していたようで、ショルツを無傷のまま守った。おかげで他の候補者の失敗や行き詰まりが目立つ結果となった。

キリスト教民主・社会同盟（CDU/CSU）も緑の党も、正式な首相候補者の指名に時間をかけたが、結局はかけ過ぎてしまった。特に同盟では、決定までのプロセスが修羅場だったため、その中にすでに次の失敗、もしくはその結末が含まれていた。つまりあからさまに行われたCSUのマルクス・ゼーダー党首とCDUのアルミン・ラシェットの候補者争いは、姉妹政党間だけでなく、CDU内部にも亀裂があることを早くから露わにしたのだ。ゼーダーが幹部以外の一般党员や、議員団や、世論調査での自身の高い支持率について何度も繰り返すのに対し、ラシェットは同盟の連邦執行委員会が候補者を指名すべきだと主張した。CDUの指導部が決めるなら、自分の

方がライバルに対して有利であることをよく知っていたのである。そして結果はと言うと、党執行部の長時間におよぶ会議の結果、ヴォルフガング・ショイブレとフォルカ・プフィの支持を得たラシェットが、首相候補に指名された。

ゼーダーは、選挙戦の間じゅう何度も、自分の方が優れた候補者だと明言していた。だがCDU内にも反対意見があり、特に保守派は連邦執行委員会の決定を公に批判するか、少なくとも自分たちもラシェットを候補者として全面的に適任と考えているわけではないと意思表示した。そんな、自分の仲間（この場合は党员）にさえ支持されていない候補者を、どうして有権者が選ぶだろうか？

特にラシェットがまだ州首相を務めているノルトライン＝ヴェストファーレン州の有権者らは、州の長への信頼をますます失っていった。ラシェットのコロナ対策は批判され、「マスク事件」への関与は新聞の見出しを騒がせた。だからラシェットの選挙戦は、必要な団結が欠けていた一方で、自身が精力的な危機管理者であるところを見せ、非常時に頼れる指導者であると証明する大きなチャンスを逃してしまったのである。

だがそこで洪水が起きた

そこに突然、パンデミックに続く2度目の惨事が起きた。ラインラント＝プファルツ州とノルトライン＝ヴェストファーレン州を、大洪水が襲ったのだ。180人以上が命を落とし、さらに多くが全財産を失った。ここでも不器用なラシェットは、適切に対処することができなかった。それどころか多くの州民が、州首相から離れて行った。ラシェット自身にはまったく冷静さが見られなかったし、宣伝担当者らは悲惨な映像を演出するために救急隊の活動を妨害し、ラシェットを壊れた家具の山の前に立たせて記者会見を開いたからだ。そのうえ、すでに語り草となっている映像がある。浸水地区を訪れ演説している連邦大統領の背後で、ラシェットがふざけて笑っているのだ。

だからラシェットは、洪水を利用できなかっただけでは無い。それどころか自らにとっても大惨事にしてしまった。それ以来、ラシェットは「道化」となった。これは誰かが書いたというわけではなく、さまざまな世論調査の回答者やフォーカスグループがラシェットをそう呼んだのである。

ラシェットの党友である現首相のアンゲラ・メルケルは、当初、選挙戦は自分には関係ないといった姿勢を取り、CDU/CSUの候補者について公に弁護することはほとんどしなかった。また洪水の時も、ノルトライン＝ヴェストファーレン州の前に、まずラインラント＝プファルツ州に行った。同州では、SPDのマール・ドライヤー州首相と手を取り合いながら被災地域を回る、あの感動的な映像が報道されている。これこそ、多くがアルミン・ラシェットに期待した思いやりの形だった。

同じ頃オラフ・ショルツは、財務大臣としての危機管理能力を再び証明することに成功し、煩雑な事務手続きなしに迅速に被災地への資金供給を行った。新型コロナウイルスのパン

デミックの際にも、ショルツは同じように早い段階で数千億ユーロの資金を用意し、深刻な経済破綻を食い止めた。

しかしラシェットは必要なセンスさも、不可欠な危機管理能力も見せなかった。また、大衆に通じるような言葉も使わなかった。大きな提案や、魅力的で説得力のある驚くような政策の代わりに、ラシェットは「Planungsbeschleunigungsgesetz (計画加速法)」を発表した。この長々しい言葉は、未来を語るというよりは、退屈なお役所仕事を思わせる。この評判があまりよくなかったため、ラシェットは投票日3週間前に自分の未来のチームを組織して、危機管理能力をアピールしようとした。以前ラシェットは、自分の側にチームを置くことについて反対の意を表明していたが、世論調査の結果が思わしくないのを見て、考えを変えたのだ。だがこのチームの詳細内容は有権者には最後まで知らされず、8人のメンバーの顔触れもほとんどわからずじまいだった。

タイミングが全て

選挙戦の終盤、2回目のテレビ討論で、ラシェットはようやく攻めの態勢に転じてショルツを攻撃したが、ショルツはこれを受け流した。この攻撃は遅すぎた。この時点では、平均以上の数の郵便投票用紙が申請され、おそらく記入も済んだと思われたからだ。

緑の党がアンナレーナ・ベアボックを首相候補に指名したのも遅かったが、あまりに遅すぎた。緑の党はCDU/CSUに比べれば遥かに団結が強かったものの、首相候補を決めるまでの長い躊躇と思惑は、メディアの注目をますますラシェットとベアボックに集めることになったのだ。

当初、それはベアボックにとって有利に見えたが、ベアボックもラシェットと同様、新しい注目度を利用できなかった。緑の党に、首相候補に対する攻撃をかわすための十分な計画がないのは明らかだった。そして選挙キャンペーンは、ベアボックが履歴を詐称したとか、著作の中で盗作したとかいう非難に対するの防御戦へと変わっていった。整然と対処する代わりに、緑の党は苛立ち、困惑した様子を見せた。ベアボックを「名誉毀損の試み」から守るためにメディアで有名な弁護士クリスチアン・シェルツを呼び入れた。どれも超然とした対応とは言い難かった。それから数週間後にベアボックは姿を消し、多かれ少なかれロバート・ハベックが舞台を引き継ぐ形となった。

メルケルの後継者を選ぶことを第1の目標とし、現在の危機そして次なる危機から国を脱出させるための選挙戦では、候補者の人物像について話すことが最も大切だ。緑の党はそれに成功しなかった。首相候補の位置づけと同じく、選挙キャンペーンにも一貫性がなかった。たとえば幸せそうな高齢者がドイツの民謡「Kein schöner Land in dieser Zeit (これほど美しい国は今、他にない)」の替え歌を口ずさんでいる、あの失敗した宣伝用スポットを見ればわかるように、緑の党

が目指す有権者のターゲット層も最後まではつきりしなかったのである。緑の党は閲覧数が多いことを自慢したが、この宣伝スポットは主に嘲笑と悪意をもって受け止められ、少なくともネットに精通した若い世代の有権者を納得させることはできなかったようだ。

その後まもなく緑の党の戦略担当者らは、さらにもう1本、暗いイメージの宣伝スポットを製作した。ベアボックを中央に置き、枯れた山林をズームバックで見せながら、気候変動による壊滅的な自然破壊を警告したのである。これがどう「美しい国」と結びつくのか、有権者には理解できなかった。洪水災害が緑の党にとって特に有益なのは、予想できたはずだ。気候変動の被害者らが、その変化の深刻さをまさに体験しているのだから、緑の党は自らの温暖化防止政策の理念を具体的にアピールしながら戦うことができただろう。だが彼らはキャンペーンの中に、そうした関連性を盛り込むことができなかった。

好機をつかむ

その代わりに、オラフ・ショルツはチャンスをつかんだ——しかも、慣れない役どころにも慌てなかったのだ。アルミン・ラシェットは突然攻撃してきたが、ショルツはうまくかわすことができた。絶えず吟味される対象は突然CDUに移り、ショルツに対する非難は皆消えてしまった。

何よりショルツは、多くのことを正しく行った。提案する政策を、最低賃金、市民手当、住宅供給、リスペクト年金 (Respektrente) など、いくつかのかぎられた主要点に絞ったのだ。ショルツは自身のシンプルで、時には退屈な言葉使いを守り、給与と年金と住宅という現実的なテーマを選挙戦の中心に据えた。一方、同盟側はこうしたテーマの多くについて、党としての立場を党内で明らかにすることをしていなかった。

そしてとりわけショルツは、自分の財務大臣としての立場をうまく使った。政府専用機でワシントンに降り立ってメディアの注目を集め、コロナ対策に何千億ユーロも投入し、さらにラインラント＝プファルツ州とノルトライン＝ヴェストファーレン州の洪水にも多額の復興費を手を駆けつけた。ライバル候補のラシェットが残念な場面を見せた場所で、ショルツは問題解決能力を誇示したのである。ショルツはその有能と見られる政治的手腕と、変化後の漠然とした社会的必要性とのバランスをうまく取った。こうした候補者を、SPDはもう長いこと出したことはなかった。

オラフ・ショルツは自分の所属政党を再び、かつては考えられなかったほどの高みに押し上げた。その土台には熟練の技と、これまでの選挙戦の経験と、そして確かに運も、少しずつブレンドされている。それが首相就任に十分かどうかは、まだわからない。だがこの選挙戦とその成功ぶりを見れば、おそらくそうであることは間違いないだろう。

筆者

ヤナ・ファウス リサーチをベースにしたコンサルティングエージェンシー pollytix strategic research 社の共同創設者兼社長。FES からの依頼をはじめ、数多くの調査を行っている。ホラント・クナウプ、イヴォンヌ・シュロート、ミヒャエル・ルーター、フランク・シュタウスの外部作業グループとの協力で、2017 年連邦議会選挙における SPD の選挙戦分析を行った。

ホラント・クナウプ 長年にわたってシュピーゲル誌の特派員を務め、現在はベルリンでジャーナリスト、作家として活躍。SPD の選挙分析「過ちから学ぶ (Aus Fehlern lernen)」を共同執筆。最新の著作は „Alleiner kannst du gar nicht sein: Unsere Volksvertreter zwischen Macht, Sucht und Angst“ (ペーター・ダウセントと共著、2020 年、dtv Verlagsgesellschaft)

参考文献

Faus, Jana; Knaup, Horand; Rüter, Michael; Schroth, Yvonne; Stauss, Frank 2018: Aus Fehlern lernen: Eine Analyse der Bundestagswahl 2017, SPD, https://www.spd.de/fileadmin/Dokumente/Sonstiges/Evaluierung_SPD__BTW2017.pdf (28.9.2021).

印刷

2021 年 9 月

© **Friedrich-Ebert-Stiftung**

発行：分析・企画・コンサルテーション部

Godesberger Allee 149, 53175 Bonn

Fax 0228 883 9205

www.fes.de/apb

本出版の責任者：

フリードリヒ・エーベルト財団分析・企画・コンサルタント部門

ヤン・ニクラス・エンゲルス：

ご注文・お問い合わせ：ap-cy@fes.de

タイトル写真：picture-alliance.com / フランク・ヘルマン / スヴェン・ジーモン

本出版物に掲載されている見解は、必ずしもフリードリヒ・エーベルト財団 (FES) のものとは一致しません。FES が発行するメディアの商業的使用は、FES の書面による許可なくしてはできません。FES の出版物は、選挙運動のために使用することはできません。

ISBN 978-3-96250-988-0